

196. 田白古墳(ヘソ塚)の

発掘調査について

1. はじめに

草津市追分町に所在する田白古墳(別称ヘソ塚)は、四世紀末の築造とされる追分古墳(円墳、直径38m)の北西に位置している。本古墳は墳形および規模など不明であるが、前方後円墳の可能性も有している古墳として、遺跡地図等に登録、周知されている。^①

当該地周辺は、区画整理事業に伴って発掘調査が実施された岡田追分遺跡が存在しており、事業実施に当たって本古墳が所在する追分町126-2番地391㎡は、公園用地として現状保存されることとなり考古学的調査は行われずに現在に至っている。

近年、周囲の宅地化が進み、本古墳を含む公園用地を整備する必要が生じてきたため、草津市教育委員会では平成元年度、田白古墳および周辺の整備に関する資料を得るため発掘調査を実施した。今回は、この調査結果を報告するものである。

2. 調査結果

本構築物は西側を宅地、北側を田と接しているが、特に北側の田とは高低差をもって接しているため墳丘の損傷が激しく、実測調査を実施したものの前方後円墳であるとの確証を現状では得ることができなかったが、本構築物の規模は南北約11m、東西約7m強を計る方形を呈しており、墳丘裾からの高さは約1.8mを有する事が確認された(図2-①)。

また調査は、主体部並びに外部施設の検出に努めるべく墳丘中央部並びに裾部にトレンチを設定し、墳丘を人力にて掘り下げた。

その結果、区画整理時における造成土が本墳裾部を覆い、旧の耕土および床土は、一部を残してすき取りが行われ消失していることが判明した。

墳丘は、大きく三層に分けて捉えることが可能であり、このうちⅢ層は、比較的細かい盛り土が行われ、Ⅲ-6層を最初に、小規模な盛り土から順次それを覆うようにマウンドが構築されていったことが断面観察によって判明した。

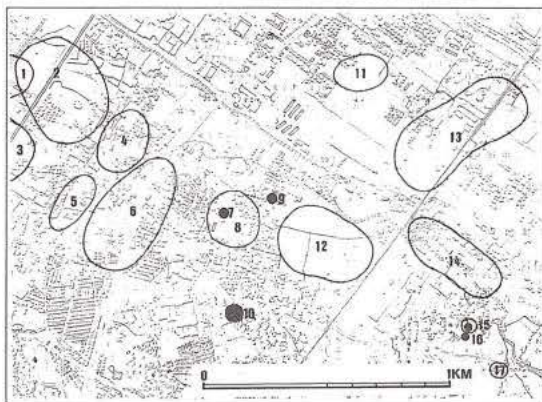


図-1 田白古墳(ヘソ塚)周辺遺跡分布図

1. 谷遺跡 2. 中畑遺跡 3. 大塚遺跡 4. 南平遺跡 5. 坊主東遺跡 6. 矢倉口遺跡 7. 田白古墳(ヘソ塚) 8. 岡田追分遺跡 9. 追分北古墳 10. 追分古墳 11. 下戸刈遺跡 12. 大將軍遺跡 13. 柳遺跡 14. 石塚遺跡 15. 無量寿寺廃寺 16. 無量寿寺古墳群 17. 西方寺廃寺

個々の盛り土は、叩き締めが成されておらず、構築された墳丘自体、脆弱な造りであった(図2-④)。

また、Ⅲ層を平面的に追いかけたところ、南東隅に於いてコーナーが検出された事から、当該構築物が方形壇状に盛られていた可能性が強い(図2-②)。

この墳丘盛土を完全に除去した段階、すなわち地山面において、南北方向に延びる溝状の落ち込みを検出した。溝跡は、東側より浅く落ち込んでおり、中央でさらに2条の小規模な溝跡を持つ。この2条の小溝に挟まれた幅1m弱の空間地は、道的な性格を有していたものと考えられる。

出土遺物としては、墳丘内より陶器類や棧瓦並びに第Ⅲ-5層から寛永通寶3枚が出土している。

出土した3枚の寛永通寶は、重なって検出されていたが、施設や容器内に納められていた痕跡はなく、埋葬に係る冥銭の可能性は低く、むしろ築造に際して納められた奉養銭と考えるのが妥当であろう。

加えて、出土した陶器類はいずれも墳丘盛土内より不規則に出土したものであり、祭礼的な要素は認められない。

出土した陶磁器類は、茶碗のほか、蓋、すり鉢等の日常雑器のみにて構成されていた。

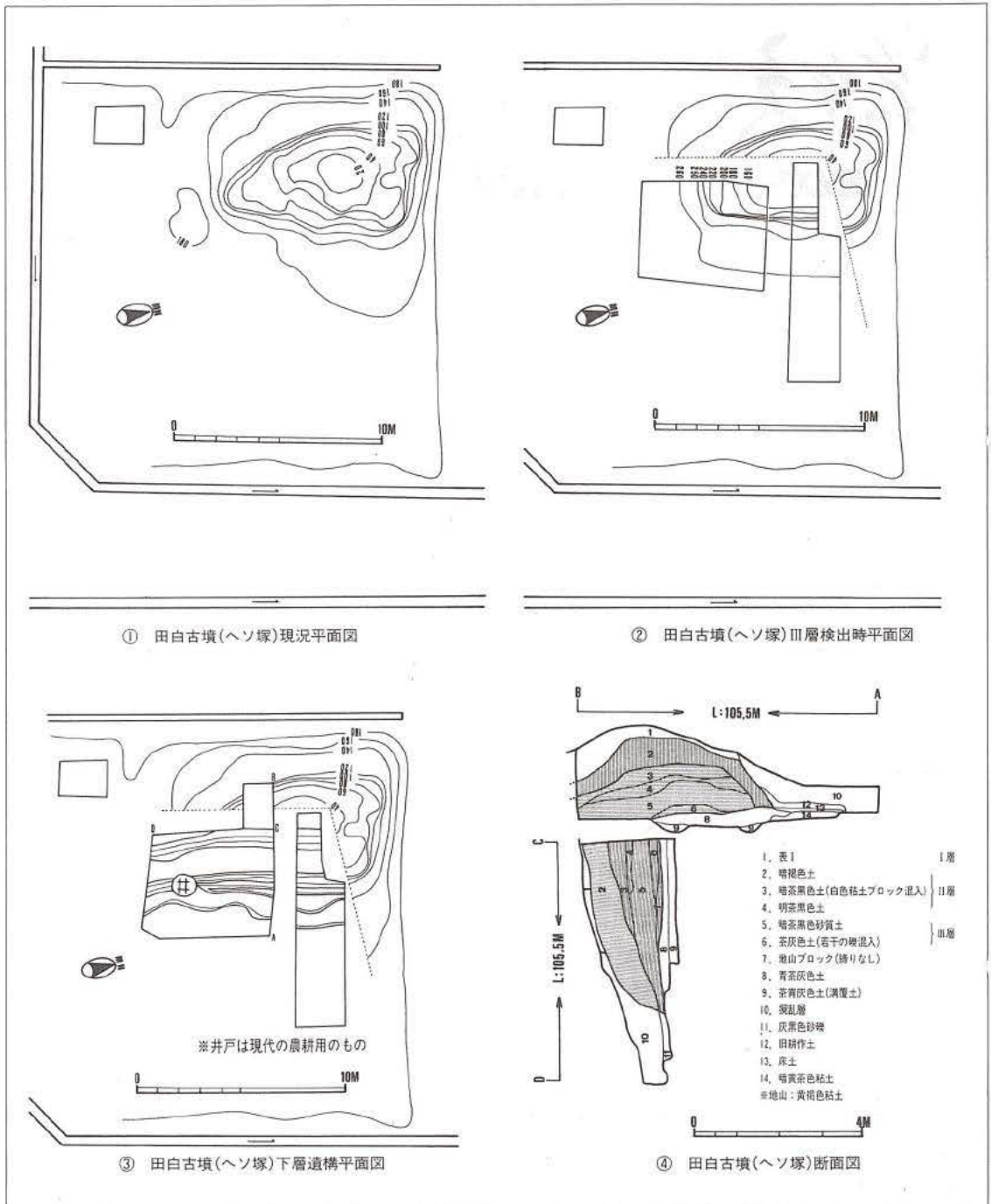


図-2 平面並びに断面図(等高線は106,042Mからのマイナス値、単位cm)

茶碗類は、形態によって体部が屈曲し、円筒形を呈するもの(A類)、緩やかに湾曲する体部を有するもの(B類)の二形態に大きく分ける事ができる(表1)。また、3層から出土した寛永通寶は、字体等より元文元年(1736)初鑄の伏見手とよばれるものである可能性が強く、これに従えば、このヘソ塚の構築年代の上

限を18世紀中葉に求めることができ^②、陶磁器類もこれと大きく矛盾しない。

3. 塚としての田白古墳(ヘソ塚)

今回、実施した発掘調査によって田白古墳が、近世期に構築された塚であることが判明した。

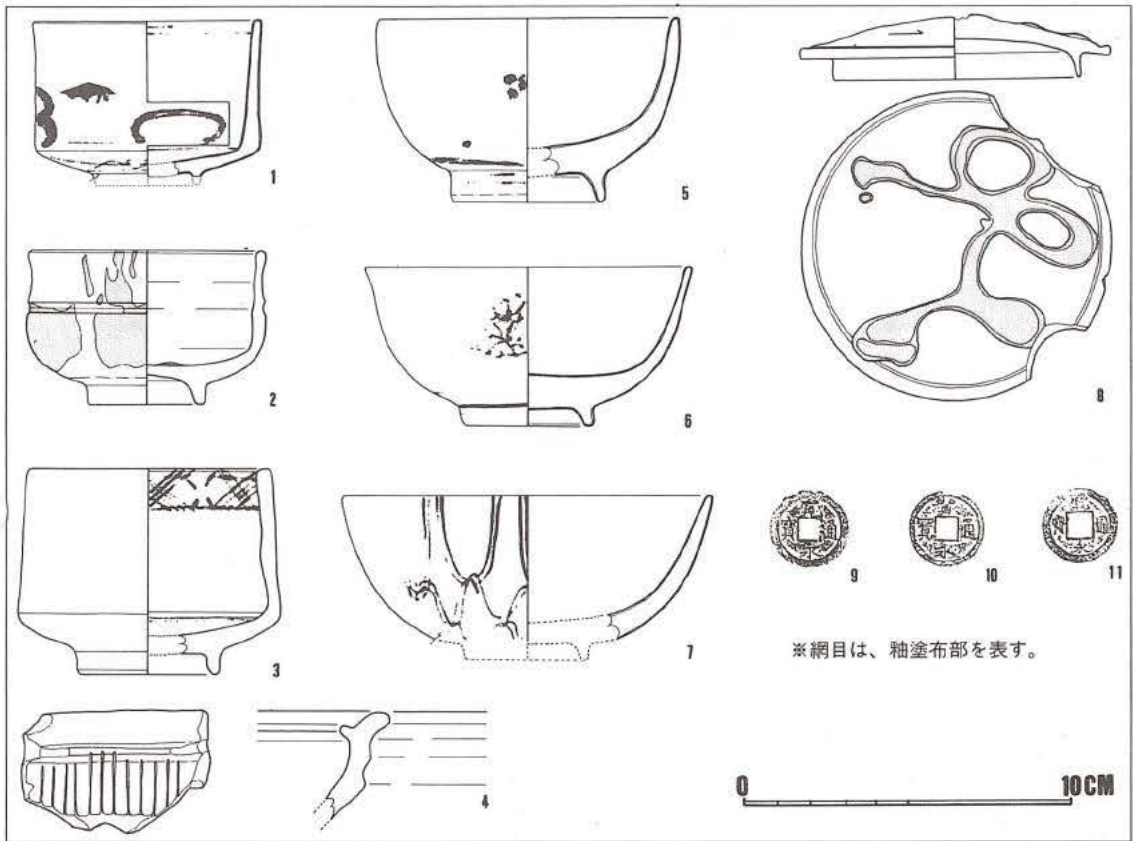


図-3 出土遺物

| 土器番号 | 形態 | 法量(口径、器高、単位：cm) | 形態の特徴 |
|------|----|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | A | 7.0, (復元高5.0) | 底部から1/4程で直立気味に立ち上がり、寄口気味の口縁を造る。口唇部内面に二条の円圈を持つほか、器面および器面底部に意匠不明の絵柄を施す。 |
| 2 | A | 7.3, 4.7 | 底部から1/3程で直立気味に立ち上がるが、屈曲部は丸みを有する。器面には、一条の沈線が施され、若干内に窪んだ後、寄口気味の口縁に続く。器面には、白色釉を浮かせる。なお底部は、釉剥ぎとなっている。 |
| 3 | A | 7.4, 6.2 | 底部から1/4程で直立気味に立ち上がった後、内傾する体部を有する。口唇部内面に二重円圈+格子状文を施す外、屈曲部に円圈を配する。 |
| 5 | B | 9.2, 5.7 | 厚手の器底から緩やかに立ち上がる体部は直接的な口唇へと続き、比較的発達した高台部端部には蛇ノ目釉剥ぎが行われている。いわゆる「くらわんか茶碗」に属する本品の器面には、意匠不明の草花文が施されている。 |
| 6 | B | 10.1, 4.9 | 厚手の器底から緩やかな屈曲部を経て寄口気味の口唇部へ続く。器面には草文と目される、いわゆる「こんやく印判」が施される他、高台部に薄い呉須の三重円圈が施されている。 |
| 7 | B | 11.4, (復元高5.1) | 直線的に伸びる体部はそのまま口唇部へと続く。器面には、二重の網手が上部に、波状文様が下部に施されている。 |

表1 出土遺物観察表(茶碗類)

近年の発掘調査によって、県内外においても「塚」に対する発掘調査の事例が増加してきているが(表2)、これらの諸調査成果を元に、当該構築物の若干の

考察を行ってみたい。

塚については、「日本歴史考古学を学ぶ(中)」や「考古学ジャーナル」などに詳しく解説されており、関心

| 塚名 | 所在地 | 形状 | 規模(m) | 時代 | 出土遺物 | 備考 |
|------------------|---------|--------|----------------|-----------|-----------------------|------------------------------------------------|
| 供養塚 | 石川県七尾市 | 隅丸方形 | 高さ、長8 | 15~16c | 釘、刀子状鉄製品、古銭、一字一石経、陶磁器 | 築造は、田期にわたり、最終的に経塚として使用。 |
| ドンドン塚 | 愛知県名古屋 | 隅丸長方形 | 長辺10、短辺7、高さ2.3 | 15c~16c前半 | 常滑大甕 | 基底部に性格不明の落込。祟りの伝承在り。 |
| 山沖塚 | 愛知県名古屋 | 方形 | 径約8、高1.6 | 近世末 | 須恵器、山茶碗、染付 | 基底部に円形土坑及び炭土(塚との関係不明)。 |
| 多摩ニュータウンNo.435遺跡 | | | | | | |
| 1号塚 | 東京都八王子市 | 不整形方形 | 3.6×4.0、高0.65 | 不明 | なし | 付属施設等なし |
| 2号塚 | | 不整形方形 | 3.5×3.8、高0.92 | 不明 | 礎石経(91,613個) | 頂部より掘られた堅穴内部に礎石経を埋納。 |
| 3号塚 | | 不整形方形 | 4.0×4.2、高0.6 | 不明 | 宝篋印塔基礎 | 頂部に宝篋印塔基礎、他に付属施設等なし。 |
| 4号塚 | | 方形 | 3.3×4.0、高0.83 | 不明 | 宝篋印塔基礎 | 3号塚との境界に宝篋印塔基礎、付属施設等なし。 |
| 5号塚 | | 方形 | 6.0×6.5、高0.61 | 不明 | 元祐通寶 | 塚中央部に円形土坑(塚との関連性不明)。 |
| 6号塚 | | 円形 | 4.2×3.3、高0.4 | 不明 | なし | 封土に簡単な版築が認められる。 |
| 7号塚 | | 円形 | 径1.8、高0.42 | 不明 | なし | 付属施設等なし。4号塚より後出する。 |
| 8号塚 | | 楕円形 | 4.5×4.6、高0.55 | 不明 | なし | 付属施設等なし。 |
| 9号塚 | | 不明 | 径2.3、高0.3 | 不明 | なし | 攪乱著しく形状不明、付属施設等なし。 |
| 多摩ニュータウンNo.474遺跡 | | | | | | |
| 1号塚 | 東京都稲城市 | 方形 | 10.0×9.2高1.8 | 近世 | 土師器15枚 | 付属施設等なし、中央部基底部から土師器が出土。 |
| 2号塚 | | 方形 | 4.8×4.8高0.5 | 近世か | なし | 付属施設等なし、基底部下に道路跡あり。 |
| 県内 | | | | | | |
| 引塚遺跡 | 坂田郡山東町 | 円形 | 径0.6、高0.2 | 近世以降 | なし | 地表下、径0.4mの範囲に栗石が分布、付属施設等なし |
| 松の木古墳遺跡 | 坂田郡山東町 | 楕円形 | 5.5×3.2高1.0 | 近世以降 | 須恵器、寛永通寶 | 頂部に割石が散在、地表下0.3mで礎を配する。 周囲に土塁、溝を持つ。埋葬施設等なし。 |
| 下間田遺跡 | 高島郡マキノ町 | 円形、長円形 | 径5~10、高0.5~2.0 | 不明 | なし | 10~30cmの礎を積み上げている。施設等なし。 耕作時の排除石の集集体か。 |
| 首塚 | 高島郡守御所 | 6 | 径2、高0.5 | 近世 | 五輪塔残欠、陶磁器、鉄釘 | 5~30cmの礎を積み上げる他、下層に径1m、 深0.6mの土坑、祟り伝承在り。 |

表-2 塚調査事例表

の高さがうかがえる。しかしながら、これらの塚のほとんどが、遺物、付属施設を伴わないものであり、塚の構築目的、年代、性格を把握する事が困難で、塚研究を遅滞する原因となっている。

表2に示した近年の調査例においても僅かに七尾市供養塚例、多摩ニュータウン遺跡No.435遺跡2号塚例が、「近世の経塚」として築造されたと分かるくらいであり、残りは実態不明なものとして、或いは塚なのか疑問視されるものさえ存在しているのが実体である。

田白古墳(ヘソ塚)は、基底部より奉養銭とみられる古銭が出土している以外は他に付属施設は認められず、構築目的等は不明であると言わざるを得ない。

ただ、多くの塚がそうであるように、築造位置が集落の外れであることや、祟りの伝承があることから、集落(当該例では追分村)の境界を表示するために造られた可能性が強い。また、奉養銭の存在を考えるならば、当該例は単なる標識施設ではなく何等かの機能を別に持たしていたことも十分考えられるが、今はこれを論ずる資料がなく、今後の課題としたい。

以上、田白古墳(ヘソ塚)の発掘調査の概要を述べてみたが、力量不足から塚そのものについて突っ込んだ検討はできずじまいであったが、この報告が少なからず塚研究に参考になれば幸いである。(小宮 猛幸)



田白古墳(ヘソ塚)調査前状況



田白古墳(ヘソ塚)調査状況

- 注 ① 「市内遺跡分布調査報告書」津津市教育委員会1984年
② 「日本貨幣型録」日本貨幣商協同組合1986年